新山協ニュース

第9号　新潟県山岳協会　発行者　鈴木敏雄

中国で考えたままの記

藤島　玄

外国の地理、歴史、文化と、現在の国家のあり方、政治、経済には一向に不案内の老登山者の私は、俄勉強しても理解と記憶がなっていない。米国はテレビで見る西部劇の程度の認識しかない如く、中国も支那と云って辮髪（べんぱつ）、纏足（てんそく）時代の残影をもって、今は米国並みに進歩変転しているのだろうくらいで、走りばしりの観光団の一員だったから、およそその考えることも知れたものである。

友誼賓館（ホテル）を出て昼食に戻る。また出て夕食に戻る。白一色の人の波だ。それより多い自転車の流れだ。バスの警笛糞食いと落付いて見向きもしない。男性も女性もそれぞれの機官と機能を身体に持てばよい。それ以上の長髪族のヒッピイ型もなければ、お化粧して着飾るモダンガールも必要なしで清々しい。これで国民は満足しているか、我慢しているのか考えさせられた。人間誰しも青春期となれば、何かの形で自己主張を派手に示して人目を引きたかろに、何かに抑圧されているのか、それより先の国家使命を自覚して忍耐しているのか。だが、白い洪水は黙々と静粛で混乱が見られない。外敵の侵掠も無く、国内の動乱も止み、凶作でも飢餓は過去の事になり、貧しいが最低の衣食住は国が保証する。手を出す乞食も、食物にたかる蠅も見られず、非生産的な犬猫も鳴禽類まで飼っていない。命令一下、協力一致、我慢くらべの「四つの近代化」の巨歩を踏み出した一端を知ったのならば、「己ノ欲セザルトコロ人ニ施スコトナカレ」の論語を思い出した。中国が国家と人民の幸福を損うような事を二度と起さないで欲しいと云うのが本心ならば、日本は節度と友愛の自制心で中国を理解して接触して行くのが道だろうと思った。つまり、日本の経済エネルギーを燎原（りょうげん）の火にしないことであろう。

至る処にあった孔子廟と関羽廟が追っ払われて、毛主席の写真が代ったのは、国の元首像として崇敬はいいとしても、あまりにも簡略された漢字が、朝鮮半島のハングル文字同様に読めず、意味も取れないのに亜然とした。文字と学校教育にも考えたが後にする。

万里の長城に立つ。長城の数字は一切省くが、聞きしに勝る長大豪壮さに手放しに驚いた。秦の始皇帝の約二一〇〇年前も、約一二〇年前の明治維新も、土木工事に機械力の無かった事に大差はあるまいが、とにかく、国家の必要度に応じて、気の遠くなるような大工事を成し遂げたのを見た。大小無数の煉瓦を作る者、焼く者、運ぶ者、城壁を造る者と、何処まで続くか解らぬ巨大工事に従事した勤労者は、食うや食わずの貧農より、命を的の兵隊より増しな待遇と、時局がそれを必要とした背景をよく認識し、案外暢気に喜んで仕事をしなければ成就しなかったに違いない。燕山山脈の頂稜に築造された長城は、八達嶺にあるように、嶺は峠で山脈の低い鞍部で交通路にもなっていた。まず、こちら側に工事基地と運搬路を整備して峠を占拠する。あちら側の城壁を固めてから、左や右の高い方へ蟻の行列の如くに進めた。適当距離の峠と峠を同方法で固めて延長して連結したのでもあろう。奴隷的位置の人民を、権力者が剣と鞭だけの人海戦術だけに成ったものであるまい。一跨ぎのあちら側へ走れば敵側だから、待遇が悪るければ逃散という術（て）もあるからだ。

黄河を提防の上から見渡した。洪水の信濃川と桁外れの泥川が渦巻いている。澄んで

冷たいバイカル湖を泳いだ仲間はいたが、黄河を前に裸になる仲間はいなかった。上流を見ても山は見えない。山の傾斜を走って海に入るのでなく、上流からの圧力で押し出され、いやいやながら華北平原を悠揚と大蛇行しながら流れでてきた有様である。泥水を探ってみると、泥はいつまでも沈澱しない。その泥がいかに微細なものか思わせた。

泰山に登る。標高は二王子岳と粟ガ岳の中間の高さだが、車を離れると山頂まで約七千段という巾二間もある堂々たる石段登りで、土を踏む処がない。老若男女が遊山に集まる中を、重荷を上向きに天秤棒（てんびんぼう）につけた勤労者はバランスよく登って行くのを見上げると、雲霧が漂う中を石段は無限に延び上る。風邪をひいたのと暑さで調整がつかず四苦八苦した。先行者の出たあとに腹作りした中段の茶屋から、霧がふきつけるともうこっちのものだ。この先二時間は持続出来る足と息が揃った時は頂上であった。この石段は長大な石材で、長城の続き煉瓦でない。泰山は岩石の裸山だし、鉄工具も進歩したであろうから、下から上げずに、伐った石段を上からおろせばいいと考えながら、高所や深雪の登りで、足を止め息を整える登り方の実験をした。

北京、済南、天津の寺院と宮殿を見た。その巨大さと豪華さは、奈良、京都、日光などは、箱庭の点景になる弄具のようなものでスケールが段違いだ。金銀紫紅の飾りに時の信仰と政治権力を示しているが、中味は空っぽで、近代的な施設に変えられてある。同じ共産圏で古代文化のある中国の中心部とロシヤの辺境のシベリヤの近代化を比較はアンバランスだがその違いがよく解り、同じ古代文化を持つ印度だけが遅々としているのを見ると、国の政治と行政の違いだけであろうか。その国の地理、地形、国民性、政治のあり方など、私の考えの及ばぬ処である。

済南ー天津の華北平原を走った時の思いだが、広漠極りない大平原は行けども行けども高粱（こうりゃん）か玉蜀黍（とうもろこし）畑だ。昔のここは全部綿畑だったと聞いた。日本は今減反問題で毎年大騒ぎである。仮に米作を止めて、桑畑として養蚕に転換となったとすると、農業の産業革命で、どんな抵抗騒ぎとなるかは想像できよう。しかるにだ、現に中国ではやっていた。つまり、「四つの近代化」の現われの一つであろうか。

最後に、今回の友愛訪中に南京ー上海を逸したことだ。南京豆を始めとして南京を冠称する日本語は十数語も定着しているが、もう来年は　好（ニイハオ）でなく一再冗（ツアイチェン）であろう。

主任検定員研修会報告

ピオレの会　三富一弥

昭和五十四年七月二十八日十時、千寿ヶ原登山研修所で受付が始まる頃、雨がポツポツ降りだしてきた。研修所でこれからの研修内容の説明を受ける。参加者各県の代表十七名、剣沢前進基地に向かう。室堂からは、折しも梅雨末期の集中豪雨のお見舞に合う。剣御前の登山道は泥と化し、滝を思わせる流雨となり、又強風におそわれ苦しい登りとなる。ゴアテックスの雨具はザルの如く雨を通し、全身ビショ濡れとなり剣御前に着く。小屋は満員と化し、登山者は外にあふれていた。風雨をしのいでいる姿は何となく痛ましい。急いで剣沢に下る。剣沢のキャンプ場は、今にも吹き飛ばされそうにたなびいている。前進基地にどぶねずみになって飛び込む。先客は一組、ストーブで衣類を乾かしていた。夕食の仕度をしていると、後続部隊が続々同じようにびっしょり濡れながら入ってくる。小屋の中は何時の間にか、満艦飾よろしく雨具や衣類の陳列となる。夕食後、自己紹介と明日の行動の説明で第一日は終る。

七月二十九日、今日の行動予定は、別山の岩場での研修会の予定だが、昨日からの雨が降り止まず、晴れるまで待つ事になりそれまで座学に決まる。午前中は各県の指導員会の状況と、指導員検定はどのような方法で行なわれているかを各県代表が説明する。

午後、小冊子検定基準の内容を再チェック、一頁より討議が行なわれた。採点については検定基準にこだわる事なく、各県は自由に採点してよいが合格点だけは守って欲しいとの事。一点でも不足の場合は不合格にする県と、第三者の理事会にゆだねるという県もあった。又指導員の指導力不足がめだち、検定会に初心者又は検定員が生徒になっ

て指導力を検定した県もあり、又要望もあった。若い人達は技術は非常に良いが、指導力が劣るという事が一致した意見だった。又山歴については、年数にこだわらず年間の山行数を重要視して欲しい、と協会から要望があった。

七月三十日、晴、今日の予定行動は午前中別山の岩場で岩登りの研修会、午後は剣沢で確保技術の研修である。

五時起床、六時出発、昨夜来の雨はうその如く空は青く晴れ上った。ラジオは梅雨あけ宣言をあげたとか。しかし風は強く冷たい。別山岩場で簡単な一ピッチ位の所で二人が一パーティとザイルを組み、トレーニングをウォーミングアップ変りに約一時間、色々のトレースをとりながらクライミングを楽しむ。

八時研修会に入る。昨日の検定基準の色々の問題点や不明点を討議しながら、実技研修会が進められていく。セルフビレーについては、トップへのビレーはトップの落下を考えてセルフビレーをとる事や、トップの確保は原則は肩がらみ、ミドルやラストの確保は腰がらみ、足場の悪い所はグリップビレーという事を指導して欲しい。又アプザイレンは原則としては横向き、下降側の手の人指ゆびをザイルの中間に入れる事や、カラビナのかけ替いの両手の場合と片手の場合のやり方、ハーケン打法、カラビナのかけ方、シュリングの応用等熱の入った研修が続いた。特に岩登りについては細かい技術はともかくとして、全般的に安定したリズム感のある登り方を重要視して欲しいとの事だった。

午後剣沢上部に移動、積雪期における確保技術の研修に入る。指導員検定基準には、岩登り技術と氷雪技術の二点に絞られる。その氷雪技術の中の確保技術が今回の研修会のメーンである。先回の指導員講習会、富士山にて初公開の新技術である通称大阪方式とよばれるコンテニアスクライムの確保は、日山協によって少し改良された。確保者（トップも同じ）右手にピッケル、メーンザイルは確保者のゼルブストの右脇にカラビナを通し、そのカラビナにメーンザイルを通し、右脇より左肩にザイルが背中を通り（肩がらみのスタイル）左前で左手にザイルのループ持つ。そのループは右巻きで五～六巻くらい、パートナー滑落と同時にループをからまないように遠くに投げ、すばやく確保体勢に入る。その時ループの身体の近い部分を親指にかけ（前回は人指しゆびと中ゆびの間にループを持つ）そのままザイルを離さず、ピッケルのシャフトをザイルと一緒に握って、滑落防止の姿勢をとりピックを雪面に突き刺す。滑落者もみずからランニングビレーを行い、確保者へのショックをやわらげるようにする。この技術の最大の特徴は、滑落者みずから制動をかけることができることだろう。

スターカット　（松永方式仮称）

この新技術も松永、増子氏によって改良された。ピッケルを雪面に刺し、そのシャフトに靴の底面よりやや長くシュリンゲを通し、靴の横面にカラビナが自由に動くようにシュリンゲの長さを調節する。そのシュリンゲは靴底の土踏まずでしっかり踏付ける。メーンザイルはそのカラビナを通り肩がらみとなり、腰のカラビナにザイルが通るという。以前のスタイルは肩がらみのザイルが肩に食込み、摩擦によって、ヤッケ、シャツ等が焼けた実例があるため、次のように改良された。

支点となるピッケルには以前と同じように、シュリンゲ（環付きで必ず0型のカラビナを使用する事）に二回巻き（メーンザイル）をするトップが滑落した場合、確保者の前を通り過ぎるまでザイルをたぐり、通り過ぎた地点よりザイルを軽く握る。ほとんど無抵抗、ショックが無いのにびっくりする。

直立姿勢の間接確保（M式スタンディングビレー）には、あくまでも直立姿勢が基本となり、決して斜面に左右されず、ザイルが九十度に屈曲するようにしなければならない。

夕方六時頃迄続けられ、昨日の雨の分迄取り戻そうと熱心な研修会になった。夕食後今回の研修会のまとめをやり、最後に閉校式、続いて懇親会と研修会の全日程を終えた。

後　感

今回の主任検定員の研修会の目的は、指導員検定の全国レベルの統一が狙いと聞いて、責任の重さを痛感した。各県を代表する立派な検定員と同席させてもらって感謝しています。色々の事が勉強でき、

沢山の技術を吸収する事ができ、又各県の人達と心の交歓ができたこの研修会は有意義な四日間でした。

国体北信越地区予選を省りみて

少年男子監督　笠原嘉明

登山が内包している一般的なイメージ、またわれわれが表現している登山というものは何であろうか。日常の世界から非日常性の領域へと行動することによって、実にさまざまの価値づけや意識がみられるようである。ささやかな人間性の回復であったり、原始への血の高鳴りであったり、自己の存在の確認、証であったりする。人と競うというよりは自然の中で人は試めされて、それぞれの力量に応じた夢と冒険、未知なるものへの憧れを追求するロマンの世界であったりする。

競技登山はそのような登山の姿とは異った形式で展開する。一つの枠の中に押しこまれ、その中で技を競い得点を目標（他者に勝つ）とする登山行動である。そのような形式（競技）に不慣れでとまどい、抵抗をおぼえながら整理がつかぬままトレーニングや準備に、そして競技当日を迎えるというのが大方の実情であろう。さらに県民性や個性が左右する。わが少年選手団もそうであった。

七月二十一日、二十二日の蒸し暑い日、石川県鶴来町を会場として北信越（五県）地区予選が開催された。事前調査も兼ねて十九日に出発、コースの下見をしたが、選手の一人が風邪のため体調が上らず、踏査競技、縦走競技とも最下位という結果に終った。

得点中もっとも大きな開きが出たのは踏査競技の所要時間、観察、定点通過の項目で、縦走競技では幕営、撤収、食品管理の項目の順であった。体力の項目は無いが、かわりにタイムリミットの定点が設置されていて、途中でバテたわがチームはぎりぎりの時間に飛びこんで、ようやく失格を免れたが、大会本部の無線が無理をしないで棄権させてはどうか、としきりに私に連絡をしてきたり、コース役員が付き添って歩いてくれたりして、風邪ぎみの選手も大変であったろうが、皆さんにお世話になってしまった。踏査は町の中で、縦走は五頭山をひとまわり小さくしたようなコースであった。

以上の結果をふまえてふり返ってみると、監督の未熟さもさることながら、体力不足と山の歩きこみが足りないことが大きな原因であると思われる。自分たちの山を四季じっくりと歩きこんでいれば、夏山の予選会など大抵のことは普通程度に対応できるはずだと思うが、気力の弱さ、体力の弱さが合宿中から目立った。そういう意味では、競技登山の是非を云々する以前のところに問題があったと思われる。

次に踏査競技だが、一回の合宿では不足であったと反省している。今後は繰り返しやって慣れさせる必要がある。しかし基本はあくまでも山行中の観察力や読図、体力の応用動作であるという考え方でいきたい。

パーテーの組み方としては合宿やチームワーク、連絡や日程の都合のつけ方を考えると、今のピックアップ方式よりは、学校単位のチームの方がきめ細かな指導と、呼吸の合った行動が期待できるのではないだろうか。競技登山であるからとにかく勝たなければならないと割り切るか、また登山の主流と考えられる方向で指導し、自分たちの山登りを全力で表現してどこまで通用するか、と考えるかは意見の別れるところだろうが、競技登山にも一長一短はあるのだから、堅く考えすぎないでそれぞれの個性に応じた悔いのない参加をしたいものだと思う。

北信越大会に望んで

成年女子監督　加藤記代子

国体山岳競技県予選が終ってホッとする間もなく、成年女子の監督を頼まれ、何も知らない私が簡単に引き受けてしまった。根がのん気であるから事の重大さも考えずに、気がついて、さあさあという始末。後にひけず万難を排し選手と共に努力したのであるが、その結果は敗北であった。

強化合宿は、登攀では、総監督の阿部信一さんを中心に男子選手の応援を得て行なった。実地訓練は、五頭山塊の赤安岩と新潟市のある場所を利用して行なった。総監督と男子選手の協力は見事なもので、一番心配していた登攀部門は、良い成績を納めることができた。

踏査は、六月中週一回男子選手を交えて、夫から指導してもらった。全員一体となって、区間の距離、高度差、三

角点の種類、水準点の位置、建造物の向きと来歴、特徴ある地形、植物の名称、展望、山岳の名称、自然現象などについて、国体山岳要項に照らし、熱心に勉強会を行なった。六月十六、十七日には苗場山において、現在地の確認、実距離の出し方、観天望気、高山植物などを学んだ。

縦走は、七月七日、八日行なった。チームワーク、生活技術、体力などを中心に、暑い陽射を一杯に受けて努力を続けた。

三部門いずれの強化合宿もチームワークよく楽しいうちに行なった。補欠は測面から熱心に応援し、経験豊かな選手は、私以上に熱心に取り組んでおり、これ以上の選手はいない程であったにもかかわらず、優勝できなかったことは、やはり監督の不徳のいたりと深く反省しています。

強化合宿の訓練の折、越後山岳会の方々を始め各山岳会の皆様から、励げまされるなど支援され、我々登山者の友情の暖かさに感激いたしました。

さて、山岳競技北信越大会が七月二十日、二十一日金沢市鶴来町にある、白山神社の総本山の白山比咩神社を、本拠地にして競技が行なわれた。

開会式の後直ちに踏査競技が開始された。コース方式で町の中で行なわれた。選手の記憶によると次のとおりであるが、指定されたコースから第三ポイントの問題がはずれて示されていたために、カットされたというハプニングがあった。

考え方は、いろいろあるかと思うが踏査問題は、国体山岳競技の規定要項に照らされておらない。実距離、高度差植物、自然などが全く出題されておらず、片寄った問題で、しかも山岳に関係のない事項であった。私としては山で競技をし、選手の実力を見てほしかった。その点とても悔しいと思います。

登攀競技は、その後、昼食もそこそこに、倉ケ岳の岩場で行なった。私自身岩場を見るなりビックリした。選手はいったい岩に取り付くことができるのかと心配したが、特訓の成果があって優勝することができた。

翌日、縦走競技が行なわれた。白山比咩神社～奥獅吼～獅子吼高原～風吹峠のコースで、蒸し暑い中で行なわれた。

以上三部門の競技が終了すると直ちに閉会式が行なわれ、新潟県成年女子が一位であるとのことで表彰された。選手共々喜びあうのもつかの間、閉会式が終って間もなく、点数の計算違いのミスがあったとの由、三位に格下げになった。いた仕方ない話であるが、主催者側の石川県はあわてふためき、うっかりしたのであろうが、未だかって監督の私に直接陳謝がないことは遺憾である。

北信越競技大会で初経験し感じたことは、選手、補欠のうち、一人は次の選手にも起用できたら、後継の道も開け優勝への第一歩ではないかと思います。また、どの選手も異口同音にいうことは、「苦しかったが、すばらしい勉強をさせてもらった。これからの山歩きが楽しくなる。」と嬉しそうに語っていることを付け加えて、報告に替えさせていただきます。

踏査問題

ポイント1　舟岡山
　a　東岸に見える部落の名称を書け
　b　道路の名称を書け
ポイント2　金劍宮
　a　今通ってきた建物の名称を書け
　b　その建物の屋根は何層であるか
ポイント3　ミスで採点なし
ポイント4　八幡神社
　a　今通ってきた石碑は何か
ポイント5　林業試験場近く
　a　今通ってきた三の宮町の公共の建物の名称は
　b　その建物の略図を示せ

夏山登山講習会に参加して

越後三山岳友会
青木　みね子

去る七月十四日、十五日と銀山の中荒沢において、県山協主催の初心者を対象とした岩登り講習会が、公認指導員の検定と併せて開催され、私も二度目の参加をさせていただいた。今回参加した目的として、単に技術を習得することだけでなく、同じ趣味を通した仲間との横のつながりがほしかったことと、今回講習会に参加した女性が、どのような状況の中で、どんな気持で岩に向っているのかを知りたいと思ったからである。十四日、小雨降る中を、予定の時間より早く着いた私を、石抱小屋のおやじさんと奥さんが囲炉端に招き、熱いお茶を入れてくれた。夏だというのに、囲炉には炭が赤々とおき、やかんからは湯気が静かに上がっている。お茶をいただき、談話をしながら二、三〇分も

すると、ザックを担いだ山男達も次第に多くなり、暗くなる頃には狭い部屋はいっぱいになった。

外は相変らず雨が降っており、明日の実技が危ぶまれる。

テーブルの上には、各山岳会の方々が持ち寄った酒や、手作りの酒の肴が並べられ、県山協の方の乾杯の音頭で酒盛りが始まった。互いの名前は判らないが、山を通じて話もはずみ、酒もいつもの調子で軽快にすすむ、話題の中では、長岡ハイクのキリマンジャロ登山計画は、とても興味深く、まるで自分のことのように心がはずみ、私の夢でもある海外登山の実現を願わないではいられなかった。

また、県、山岳婦人副部長をやっておられる加藤さんとの談話の中で、「たとえ地図が読めなくても、荷物を担げなくても、何か一つでも得意なことがあれば、それだけで大事なメンバーの一員である。」という考えを聞き、地図も読めなく、天気図も、まともに書けない私にとって、なにか安心させるものがあった。と同時に主婦でありながら婦人副部長という、大変な任務に付き、又、登山に対する熱い情熱と前向きな姿勢には頭のさがる思いがした。

時間の過ぎるのも忘れ、二十三時過ぎまで続いた宴も、明日の行動を考え、床に着く。

十五日、昨日から降り続いている雨は、今朝になっても止む気配もなく、皆の気持まで曇らせるが、腹が空いては戦は出来ぬと、熱いお茶とおにぎりで朝食を済ませた後、各山岳会で持ってきた、ザイルや安全バンドを取り出して、長所や短所を検討し合ったり、ザイルを使っての結びの研究をやっているうちに、雨も小降りになり、薄日も射してきたので、身支度を整え早々に出発することにした。

沢伝いに三、四〇分も歩くと、沢はまだ厚い雪に埋ってい た。

今朝、編成された班ごとに実技講習開始となる。私の班は、講師一人に、長岡ハイクの女の子と私の三人である。

彼女の身長は、一六五センチ以上もありそうな大柄な体で、私の一五〇センチとは対照的であり、面白い組合せに笑ってしまう。

ザックから、ザイル、バンド、カラビナ等を出し、装備を整える。最初にフリー登攀をやるようにと言われ、私から先に登り始める。岩場といっても、緩い土手の斜面のような所なので、危険だと思えるところもなく、ホールドやスタンスも多いので、初めての人には丁度よいが、ほんの少し経験した私にとっては、物足りなかった。

高さ、五、六メートルのところを一、二度繰り返してから、懸垂下降の練習に入る。上部の木の幹に、捨て綱をかけ、ザイルを通し、肩がらみで下降するが、ザイルが泥まみれになり、濡ているため、とても重くやりにくかった。

私は懸垂下降する時、いつもピョンピョンと反動をつけてしまうので、静かに降りるよう注意をされた。

昨日からの雨で、地盤が緩み落石が多く、隣りの班では下の取付点に居た女性の大腿部に、こぶし大の石が当り、一時は、どうなるかと心配したが、雪で湿布をして、しばらく休んでいると、なんとか歩けそうなので安心する。

一息いれてから、臨時登攀の練習を行い、一通りやって昼食にしたが、この頃から風が出てきて、汗ばんだ身体は冷され、ゆっくりした昼食もとれず、震えながら早々に済ませた。誰かが焚火をしようと、雪上に落ている小枝を拾い集め、火をつけようとするが、木が湿っているため、なかなか燃えそうもないし、益々寒くなるばかりなので、午後の実技は打ち切りにして講習を終えた。

講習会を終えて

最初の目的であった、女性との会話が少なかったのは、残念だった。しかし、岩登りの上では高齢とも言える、三十代後半、四十代の女性や男性が、とても素直な気持で岩に接している姿には、なにか、教えさせてくれるものがあったし、実技内容にしても、前回と比較すれば（前回は、岩場までの距離が長かったうえ、道を間違えたり、お昼頃からの雨で早々に下山した為、講習時間が少なかった）問題にならない程、充実していて楽しかった。これからも、基礎をきちんと身につけ、トレーニングを重ねて、楽しく、安全な岩登りを心掛けてゆきたいと思う。

北海道での耐寒訓練

関川村山の会　平田大六

登山の場合、低温という状況は、しばしば経験するものであり、人体や装備について、低温での影響や対策をこうずる必要はある。ささやかな実験ではあったが、真冬の北海道での体験について報告する。（目的）

年間比較的低温を記録する二月上旬に、時期を定め、地域を北海道とした。そして、ここでの主として天幕生活においての、影響などについて体験してみることを目的とした。また低温が、装備や食料などに与える影響も同時に調査し、低温地域での行動についても、実際に経験してみることにした。

（行動概要）

一九七七年から毎年実施し、三回を重ねた。いずれも二月上旬であり、装備等は、冬山装備に準じたので省略する。

◇一九七七年　宗谷岬

隊員三名

二月十一日バスにて宗谷岬に下車。風雪。バス停小屋にて宿泊。風速十メートル。氷点下十六度。

二月十二日、前日と同様の天候で、全装備を背負って、国道二百三十八号を、約二十キロメートル、稚内まで歩いた。稚内市内にて幕営。天幕は、ビニロン合掌外ポール内に冬用内張取付。十三日、天幕を徹収して、帰路国鉄に乗車。

◇一九七八年　母子里

隊員六名（女二）

二回目から母子里を設定した理由は、この地が過去において氷点下四二度の国内最低記録をもっており、南極の昭和基地よりも寒いため、同越冬隊のトレーニング地として利用された実績による。

二月十日、北母子里駅に下車し、母子里小中学校校庭を幕営地として選び設営を開始した。風なく曇。天幕はナイロンウインパー内張付。夜半にしたがい氷点下二十度をさがりはじめた。羽毛シュラフザックにカイロを使用。十一日快晴、日の出直前氷点下三十二度を記録。幕外にほうり出した日本酒が、壜の中で凍結していた。午後の列車で現地を引きあげる。

◇一九七九年　母子里

隊員十二名（女三）

二月十日午後、母子里着。昨年と同様の場所で天幕を設営。天幕は昨年のウインパーの他に、ダンロップ外張付のものと計二張を使用した。曇。昨年のように思うよおに気温低下せず。氷点下十二度。十一日早朝、降雨一時間程あり、みぞれから風雪にかわった。天幕は、二張とも雨を通過させてしまい、シュラフザック等天幕内のものをぬらした。終日風雪で視界二十メートル。積雪さかんである。イグルー構築の実験をこころみ、半日がかりで一基建設した。午後は、酪農家の牛舎を見学し、同夜は天幕の外にイグルー内で三人宿泊。十二日絶え間ない風雪で、天幕は雪で埋れていた。深名線は、雪のため運休となったが、校長先生と駅長のとりはからいで、「今日かぎりで帰る新潟からの十二人の客」があるということで、ラッセル車の出動となった。かろうじて一便往復して、冬の母子里の脱出に成功した。

（結果や反省）

まず防寒について。強風下では、皮の五本指手袋はたあいのないものであった。氷点下十六度で、風速十メートルの風にむけると指先に激痛がくる。やっぱりミトンでないとだめだった。一九七九年にはじめて化学カイロを使用したが、暖かさが、ゆっくり感じられるという欠点はあったが、使用にたえてくれた。

氷点下三十二度では、呼吸が重くなった。肺が思うように開いてくれない感じであったし、口を開いて呼吸していて、舌の裏側が、軽い凍傷になってしまった。バーナーは、ガソリンのGI型を使用したが、プレヒートの生ガソリンの着火がにぶい。通常であれば、ボッと火が燃えあがるのだけれど、この位の低温になると、チョロ火になる。本格的に燃えはじめれば、問題はない。

食糧計画は、凍結を考えて、行動時はパン等の乾燥物とし、調理は熱湯をつくればすぐにできるもののみに限定した。

低温下で、主として撮影器具にトラブルがおこった。これは第一回目の一九七七年氷点下十六度の宗谷岬で経験した。一眼レフのカメラのシャッターがおりなくなったし、8ミリや録音機のモーターがまわらなくなった。古いレンズシャッターのカメラだけが、グリースが乾ききっていたのか大丈夫であった。二回目からは撮影器具をカイロではさみつけたり、撮す間際までフトコロや保温袋に入れておいたりして解決した。

（おわりに）

以上で報告を終えるが、山岳地帯でないため、いざとなれば学校や民家に逃げこめるという安心感があったことはいうまでもない。また、特に母子里部落では、学校の先生をはじめ、地元の方々にお世話になった。このような人達の暖かい人情と耐寒訓練というものを両立させてゆくのは、ひとつの決心が必要であった。

来年のために、若干の装備を現地においてきたので、更に本格的な計画で次回はのぞみたい。

警告

県山協加盟団体において、十月二十日、巻機山割引沢テング岩付近にて、負傷事故、翌二十一日駒ケ岳大チョウナ沢において、死亡事故が発生しております。各団体におかれましては、普段の登山指導に併せ、一層の安全登山指導普及に努力下さるようお願い致します。

十月二十一日、駒ケ岳大チョウナ沢S字状付近において新潟山岳会、渡部宜輝氏（二十六才）が沢に転落され、死亡されました。ここに謹んでご冥福をお折り申し上げます。

山岳共済掛金など改訂

㈳日本山岳協会が実施している山岳共済制度の掛金などが、損害保険会社において傷害保険料金等が改訂されたため、山岳共済制度においても内容が下記のとおり変更されました。

実施期日は、昭和五四年第二次分から（一〇月一日から）。

×××××××××××××××××

き、設営の増子高体連委員長の活躍に一同感謝致しました。

（藤井　信）

(1)共済金額	新	旧
死亡・後遺障害	100万円	50万円
遭難捜索費	100万円	100万円
(2)掛金	5,760円（月480円）	3,000円（月250円）

高体連登山部顧問会議開催される

十一月九日～十日、巻高校において、国体少年男子、少年女子の強化案について、協会側との合同打合せが行なわれ、その後日本山岳会より川上隆先生を招き、「高所登山について」、貴重なヒマラヤ登山体験を元にした講話をいただき、有意義な会となる。

同夜は白楊会館において、深更まで和やかな親睦会が続

おめでとうございます

地区指導員合格

宮崎幸司（長岡ハイキングクラブ）
中野正剛（新大山の会）
加藤明文（むささび会）
加藤記代子（むささび会）
遠藤家之進正和（むささび会）
五十嵐義和（長岡ハイキングクラブ）

銀山平において、五月雪上技術、7月岩登り技術の検定会が催され、前記六名が見事難関を突破されました。今後、後輩の指導と益々の技術の修得に励まれ、協会発展の為に御協力お願い致します。

（杉原八百樹）

指導員研修会開かる

十二月二日朝から長岡市自治会館において、県下八十四名の指導員が参加され、国体審判基準、指導員検定基準と基本技術、等についての研修会が催された。又午後からは日本山岳協会から「雪崩」の権威、金坂一郎氏の講話が有り、雪国新潟の指導員は身近な問題として、熱心に聴取され討議された。研修会の成果は、各指導員によって県下岳人の間に広く普及、伝達されることでしょう。

（田中栄弘）

(社)日本山岳協会新会長決まる

日本山岳協会の渡辺公平前会長が、今年度通常総会の直前に急逝され、会長空席で四ケ月余を経ました協会では、十一月十一日に臨時総会を開催し、今井田研二郎氏を新会長に全会一致で選出しました。

今井田研二郎氏（旧姓　国塩）の紹介

○岡山県出身
○明治四十年八月二十日生（七十二才）
○品川区上大崎二―七―一
電話〇三（四四六）六四五五
○㈳日本山岳会会員（No.一六二〇）
元評議員
旧制松商山岳部で穂高周辺の研究に打ち込み、昭和初期の奥又白開拓（松高ルンゼの名に残る）等で知られる岳界の大先輩であり、その後東大スキー山岳部でも活躍された。

加茂山岳会創立五十周年を祝う

十一月十八日、加茂市山重において、盛大に記念式典が催された。協会から望月副会長が出席しました。

益々同会の発展を祈念しましょう。

祈

新会員紹介

アライアルパインクラブ（会員十七名）
新井市仲町　つるや薬局内
電話〇二五七―二―二〇八
代表者　岩崎芳昭

後期行事予定

新年会
日時　一月二十日（日）午前十一時より
会場　きなせ亭
電話四―一八〇七八
（新潟駅前、まるためビル前を右に入り金剛ビル四階）
会費　三,〇〇〇円
申込　上、中、下越、新潟各連絡所へ
冬山研修会　二月上旬
（峡彩、むささび、菅名）

あとがき

日本の国は四季の変化がはっきりしていて良い。という人がおります。自然を愛する人達は、その四季の変化を追い求め幾多の道を歩くのでしょう。今年の協会行事は悪天候に悩まされる事が多かったようです。美しいものにはトゲがある、ではありませんが、今年ダメなら来年の自然を！と皆様無理のない山行をお願い致します。

良い正月を向えられますよう。